

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2006年度研究成果報告書

| | | | |
|---------|-----------------------|-------------------|----------------|
| 研究科名 | 立教大学大学院 | 文学研究科 | 日本文学専攻 |
| 指導教員 | 所属・職名 | 氏名 | |
| | 文学部教授 | 小峯和明 印 | |
| 自然・人文の別 | 自然・ <u>人文</u> | 個人・共同の別 | <u>個人</u> ・共同名 |
| 研究課題名 | お伽草子の女たち—恋愛と男女関係を中心に— | | |
| 研究代表者 | 在籍研究科・専攻・学年 | 氏名 | |
| | 文学研究科日本文学研究科5年 | Plaur Agnieszka 印 | |
| 研究組織 | 在籍研究科・専攻・学年 | 氏名 | |
| | | | |
| 研究期間 | 2006 年度 | | |
| 研究経費 | 200 千円 | | |

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

室町時代の代表的な文学のジャンルであるお伽草子は他の当時の文学のジャンルと比べて研究が盛んではなく、外国人研究者が最近までは文学な価値の乏しいジャンルとされていた。しかし、最近はお伽草子の文学的な価値が認められ始めて、代表的な作品研究が次第に増えてきたが、約五百群のお伽草子では研究の対象になった作品の数が限られ、全く未開拓の作品も数多く存在する。

本研究は今までほとんど研究者が目を通せなかったお伽草子を台にし、作品の中にみられる人間関係（男女関係）を重視し、ジェンダー的な視点から女性のありさまを考察することである。従来のお伽草子の研究はジェンダー問題を考察されておらず、女性の問題にもいまだ触れていなかったため、本研究はお伽草子の研究のテーマの中には新しい展開であろうと考えられる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ お伽草子 } { 男女関係 } { ジェンダー }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

2006 年度に『お伽草子における女性たち—恋愛のかたちを中心に—』という題の博士論文中間報告書を提出し、博士論文を執筆中である。この中間報告書には、現在に至るまでの研究成果である論文を載せていた。

本研究は、ほとんど研究されなかったお伽草子の作品の分析などを行い、研究のテーマである女性像を追求する目的を持つ。そのために、本研究の論文は女性を主人公にするまたはあらゆる男女性問題を中心する他、従来の研究論文が少ない作品に集中している。

「悲恋の変貌—『扇流し』を中心に—」という論文には、悲劇のヒロインになった女性像、夫婦関係や女性の「婚姻と至福」の問題を考えながら、『扇流し』のテキスト分析などを行っていた。

「強い女のイメージ—『天稚彦草子』を軸に—」論には、『天稚彦草子』という部嬬入り譚や七夕伝説にもとづいた人間の女性と異類の恋愛物語、または主人公である女性の活動的な描写について考察していた。

又は「『かざしの姫君』の恋のゆくえ—試論—」という題の論文は、同じく人間と異類関係を語る『かざし姫君』には、人間の女と菊の花化身である男性の恋とその問題と意味について考えていた。この作品に見られる女の名前でもある「かざし」の意味についても考えていた。さらに、この物語の重要な一部である挿絵は、伝本によって異なることに気づき、流布する伝本を集め、これらの挿絵の相違についても論じるつもりである。

『桜の中將』の住吉明神—「恋の神」への転生—には、ほとんど知られてないお伽草子である『桜の中將』を分析し、物語展開に重要な役割を果たす住吉の神を論じていた。この作品の住吉の神は『古事記』・『日本記』に現れる神と全く異なり、「恋愛の守り神」として描写されており、その役割の変化の理由と結果の追求を試みていた。

研究計画は、研究の本性である男女問題・女性とジェンダー問題という三本の軸になっているが今年度は、本格的に女訓書に焦点を当てて、このジャンルの作品の中の女性像について考えてみていた。

女訓書とは「女性の人生の理想と規範とを、日常生活での立ち居振る舞いに引き付け、説いたものである」(美濃部重克『お伽草子事典』による)。だから、女訓の作品群を検討すると当時の女性像がみられ、又は男の立場から「女はどうあるべき」とみなされていたのかを考えられる。そしてこのような女訓の「教え」はお伽草子の物語に影響を与えたかどうか実態が探られると思う。

お伽草子には教訓的な内容や様々な知識を盛り込んだ啓蒙的な内容を持つ作品が多く、お伽草子の大きな特徴の一つであるとも言える。また読者は主に貴族・武家の子女など世間や社会の知識が足りない人々であったとも考えられる。だから、このような作品を女訓書の一種として考えることができる。またお伽草子の中世の女訓書や近世に数多く書かれた女訓書のつなぎ目のようなものであると思う。ただし、中世や近世の教訓書と違って、お伽草子の場合、教訓書や女訓書に引用される様々な知識は、単なる「教養」ととどまらず、おのおのの教訓の例証として積極的に用いられていたという特色を持っている。

その点から考えると、お伽草子でありながら女訓書に近い『窓の教え』、『乳母の草子』、『なには物語』、『若気嘲嗚物語』のようなテキストは物語性が乏しいとよく言われるが、当時の女性像を把握するために不可欠な資料である。

研究成果の概要 つづき

女訓書には、王朝物語とのかかわり方から二系列の「在り方」が認められる。その一つは、「平安物語のうちにとどまる在り方」の女訓書で、つまり『源氏物語』など王朝文化を重視し、平安時代物語や和歌の知識の重要性を語るいわば古典的な女訓書である。また、二つは、「(平安物語)の外側に身を置く在り方」の女訓である。『源氏物語』などの影響下の世界をつくらず、浄土宗観や儒教的な考えを取り込んで、貞女や烈女の世界を作った近世的な女訓書である。

この一系列のつまり、「古典的な女訓書」の代表的な作品は、伝阿仏尼作の『庭のをしへ』(広本である『乳母のふみ』、略本である『庭のをしへ』)、『身のかたみ』、天理本『女訓抄』で、お伽草子類には『乳母の草紙』である。

二系列の「近代的な女訓書」は『女訓抄』である。この系列に完全に当てはめるお伽草子がないと言われている。

ただし、『めのとのそうし』は『庭のをしへ』の影響を受けながら、平安物語の世界から離れていた作品である点で、この二系列の中間的な作品であると思われる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)